

朱雀頭筆復元品（天平筆）

一本

全長三〇・五cm 管径一・八cm

当館には、様々な資料が收藏されています。昭和三〜四〇年代頃、滋賀県の「無形文化財」に指定された人々が作った作品もその一つです。文化財とは古い有形品だけではなく、伝統的な工芸品を制作したり修理したりする技術もまた守り伝える必要があるという考えで、当時、揉み紙や藍染、雁皮紙、筆作りなどの特殊な技術を持った人たちが、これに指定されました。

この筆は、高島市安曇川町の筆師である第十四代藤野雲平うんべいの作品です。優れた筆師であった雲平は宮内庁から依頼を受け、正倉院に残された奈良時代の大仏開眼供養かいげんくように用いられた巨大な筆を調査し、昭和五十四年にその復元模造品を納めたのです。その製法は現在の筆と異なり、鹿毛と麻紙ましを交互に重ねて穂先を円錐形に成形したもので、その形から雀頭筆とよばれました。今回の冬季特別展「近江三都物語」で、大仏開眼に関わり、初めてお披露目ができました。

